

(刊夕日十二)

新新聞

休刊大祭日毎日隔
 定價 二枚二錢五錢
 廣告料 雜報欄五十錢
 所定二十錢増
 發行所 平新聞社
 編輯部 市島館三
 印刷部 市島館三

深み行く 秋の衛生

◇快よい秋の世界となつた。そのかわり消化器系傳染病流行もこのシーズンに最も多い。何よりも御用心大切のこと。と曰く赤痢。曰くチブス。曰くコレラなど等甚だしくにぎやかなことである。だが要するに胃腸が健康でありさへすれば何か来やうとおそるゝに足りない。胃を健康にし胃酸を分泌を旺盛にしてバクテリア連中を滅してしまへばよい。而して腸が健全となれば消化されたものはみんな吸収されて天高く馬こゆる筆法でわれ／＼人間も榮養良好にして自然に肥てゆくゆくであらう。

◇その次には呼吸器病をもつ人への御注意朝冷やと暮の寒さと夜中の冷かさは特に注意して風邪にかからぬやう慢性的に呼吸器系統を病んでゐる人はこの時の注意如何で今年に樂に過ごせるのかといつてあまり用心しすぎて寒さ暑さをおそれるのはあまり度を越した厚着は却て害がある汗が出る程厚着をしてゐる夕方に感じる甚だしい寒さに却て風邪を誘發することさへある薄着を厚着も程度問題でよく頭を働かせ身體に丁度合つてゐるだけにしてければならない寒ければ厚くし暖かければ薄くするその調節を自由に適度に行はねばなりません。

「不可ませんよ、妾等のいふことを聞いて下さらなさい、死んで了ひますわ」
 「流行性感冒でかい」
 「イヤ、戀の病で、すわワイ、と騒いでゐる。見受くる處、白井も望月も代議士らしい、代議士といへば國民の代表たる政治家である、政治家がこの醜態は何事だ、怪しからん、以ての外だ、いふ吾輩の如きものは現代の政治家として資格がないものかも知れん、政治家と藝妓、蓋し異名同種のものかも知れない。」
 「大變々々、大變なものが見えましたよ」
 「望月が煎豆の袋を掴み上げた。」
 「何だ、豆か、驚ひたね、第一流の藝妓ともあらうものが、豆をかじるなんか怪しからん、これからお座敷へ出る毎にみんなへ報告してやる。」
 「いいわ、藝妓だつて豆を喰べるわ」
 「賣るんぢやないでござるか、アラ望月さん、覺へて來ッしやい、あの妓の一件をスツパ抜きますよ」
 「閉口々々」
 「望月は頭を掻く、この男、女にかけては餘程、弱い見ゆる。」
 「藝妓が豆をかじつとつたぞ、これからみんなに云つてやるんだ」
 「云つて下さい、白井さん豆を喰つてゐるのは節米してゐるんですよ」
 「これは參つた」
 「白井が頭をかく」
 「表戸が開いて、騒々しいね」
 「入つて來たのは女將らしい、二十七八の、何處となく重みがある。」
 「今まで騒いでゐた連中はビタリと鳴をしづめて、お歸りなさい」
 「お歸り」
 「お歸り」
 「口々に挨拶して、借り來た猫のやうに畏まる。」
 「アラ白井さん、望月さん來ッしやい」
 「お早う」
 「久し振りだね」
 「本當にお久し振りでですね」
 「この頃は」
 「議會の方が忙がしいもんだからね」
 「さうでせうね」
 「今日はゆつくりして下さつてもいいんでせう」
 「ラム、少し女將に相談したいことがあつて來たんだがね」
 「さうですか、お二階へ、これ、お前方向をしてゐるんだね、お二階へ御案内をしないか」
 「ハイ」
 「一人が蒲團を持つたり、一人が火鉢を持つたりして

小説
 待合政治
 A M 生
 (六)

磐城セメント販賣所!!
 磐城平町五丁目
 特約代理店
 諸橋久太郎商店
 振替口座東京一〇九五六番
 電話九番一三三九番

日進堂へ
 平町の
 電話三三三六番

萩野洋品店へ
 平町驛前
 十一月より冬物大賣出し致します
 秋冬の洋品は是非
 萩野洋品店と廣告欄に掲載致して置きましたは萩野洋品店の誤植でありました此に訂正致します

只野忠康
 平町南町
 請負業

目神教水
 平町搔樋小路
 發賣元 魁文堂
 電話三三三番

田中宣治
 平町新川町
 請負
 銅トタン 諸建根植 屋建築 諸工種 へエント造

廣瀬支店
 平町田町 電話五十四番
 振替東京四七二九

女の方へ衛生思想普及の爲め
 十月「脱脂綿」販賣いたします
 原價(小金六錢) 大銀三十八錢
 秋から冬へかけて痔疾患者は悩みが深く此時季に手當を怠ると怖るべき痔瘻や脱肛になります
 新發見藥外用リット 金五十錢
 製造元 東京加藤翠松堂株式會社
 平町田町
 藥劑士 宇佐美藥局
 電話五五一番

